

あを 4

2018



小でまりの花に風いで来りけり

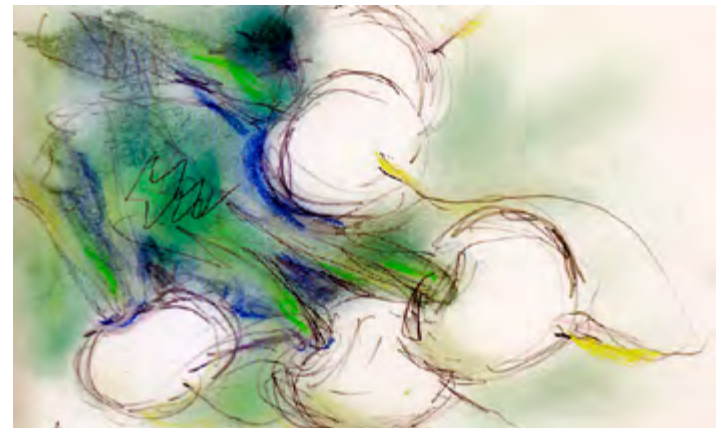
万太郎



紬

あそ

四月



方向音痴なれば

東京

佐藤 喜孝

天の川三途の川と間違へて
もうすぐに使ふ脚だぞ撫でてゐる
道行はをみなさきだて梅の雪
早春の高き梢のせせらげる
人こへば妻飛んでくるフリージア

平昌五輪

東京

赤座 典子

高位級と名乗る陣営冴返る
まんさくや元気貰ひしハイジャンプ
五輪新勝者に涙夜半の春
称合ふライバルの背朧かな
金銀と号外の舞ふ春の宵



埼玉

秋川 泉

春が近づく

春富士を観るだけに乗るエレベーター
春の星数へながらに葱を抜く
梅林や猫も登りて香を愛でる
沈丁花 蒼いっばい 日曜日
深呼吸しては句作り 春寒し

東京

石森 理和

雪

雪降りりずんずん上へ昇る様
並べ置く蜜柑の皮はお手洗
歌姫ぞ花束届く 誕生日
兄達の歳を越せりおでん鍋
手放せぬ綿入れ半纏 婆俣ぶ

埼玉

大日向幸江

花びら

花びらのやうな足跡 雪の朝
春浅し米とぐ水の澄んでをり
大雪やとろとろと煮たカレー
春の雪野座の大仏 白化粧
紫に色変へゆきて春の山

千葉

黒澤 佳子

焼芋

ババになると友の賀状や久し振り
自家製とメモ入りレモン拳大
餃子練る鼻にツーンと咳き込みぬ
蓮二節包む 新聞カラー刷
焼芋ー馴染みの声に飛び出しぬ

東京 七郎衛門吉保

ピョンチャン

ピョンチャンに国境越える梅の花
レジェンドと云はれ空飛ぶスキーヤー
氷上の涙と笑顔コンマ1
メダル獲るママアスリートに春動く
一と月もかまくら溶けぬ底の冷

東京 篠田 純子

春隣

夫作るスモージー甘し春隣
冬日向指は五七五数ふ
正社員に登用決まる春隣
自転車を外股で漕ぐ春隣
女子寮生の誰も彼も失恋梅の花

石川 定梶じょう

雪解川

雨まじり雪降る爛はみづから付く
春を待つキッコーマンの醤油差
建国の日やすりこ木と播鉢と
目薬が目に落ちおのれ冴えかへる
雪解川夕べ音のみ暮れのこり

埼玉 須賀 敏子

二月や

会釈するマスクの我を訝しげ
春光や深くふかあく胸の内
猫塚や山房跡の梅開く
二月や御上りさんで神楽坂
道産娘の銅メダルなりカーリング



埼玉 竹内 弘子

「題詠しりいず」拾八号より（一九九二年刊）

満天星の赤芽こぞりて卒表す
蒙古斑あとかたもなし卒業す
紅梅や雨のち晴ときめて出づ
電柱の「赤面恐怖」つちぐもり
棒杭に紅絹のかかれる雪解川

東京 田中 藤穂

春囊

裸木のほのかな気配老桜
土濡れゆく今降り出せし春囊
春みぞれ有平棒を滲ませて
春愁にあらず老身横たへる
一人ずつに今日といふ日よ花ミモザ

三重 長崎 桂子

如月

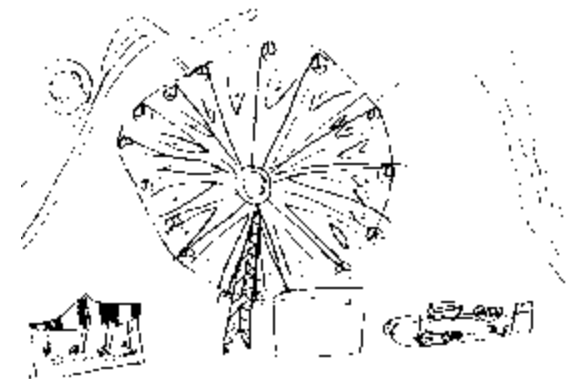
雪積る若き喜び老は愚痴
又吹雪確と戸締り怖気をる
吹きだまり又覗かせる寒雀
鈴鹿峰暁に照り映ゆ春近し
春立つ日雀連れ朝豆拾ふ

東京 森 なほ子

寒の明

寒明くる塩壺の塩底をつき
検診の予約延び延び寒明くる
寒明けてこの一年に腰据わる
鳥塚に群るる雀や風光る
春を待つ枝の先より暮れ初むる

まつすぐに迷路でありし初昔	佐藤喜孝
寒に入るこんもりと足す砂糖壺	森なほ子
数へ日の鷗と会ひしひと日なり	山莊慶子
年玉の礼ぼそぼそと受験生	赤座典子
雪しづくはらり小犬が飛び跳ねる	秋川 泉
もともとは伊豆の道辺の水仙花	石森理和
七五三ねまえ紅葉も風に揺れ	大日向幸江



ちゃんちゃんこハッカドロップ探し舐め	黒澤佳子
初夢を話をかしく朝餉かな	七郎衛門吉保
銀座露地もっさりとした嫁が君	篠田純子
初日さす袋戸棚に引手あり	定梶じょう
白腹のとどまる処冬ぬくし	須賀敏子
雪落とす椎の身震い止まぬ日よ	田中藤穂
冴返る星を仰ぎて雨戸引く	長崎桂子



鰯とは冬の水から出たやうな

佐藤 喜孝

何と淋しい苦しい句……と、胸ふさがる思いが致しました。奥様の恭子さんは、二〇一七年五月二日に旅立たれました。頼り甲斐のあるあたたかい方でした。まだ日も浅くお辛いばかりの日々の中での句。残された方の言葉に尽くせぬ想いをたしかに承りました。(泉)

七草や時流れ乾燥粉末に

長崎 桂子

正月七日の七草粥。芹、薺、御形、繁縷、仏の座菰、清白。これらが乾燥粉末になっているのですね。それが現代、そうなのですね、私には全く考え及ばず目から鱗が落ちました。(泉)

風の街冬三日月の低くあり

森 なほ子

この句の中に人の気配はなく、北風が吹き三日月が低くある。いかにも寒く寂しい風景。それでいて私はとても心ひかれる一句です。哀愁が漂っていて胸の奥底にある遠い昔の思い出が呼び覚まされました。(泉)

一区切りして蕎麦茶飲む小晦日

赤座 典子

年もいよいよ詰まり何かと気ぜわしい小晦日の頃、段取りよく仕事をかたずけてやれやれと。一杯の蕎麦茶が良い味をだしています。普通のお茶ではつまらない。すっきりした句です。(なほ子)

風花の舞ふ駅にある投書箱

秋川 泉

ちゃんちゃんこハッカドロップ探しをり

黒澤 佳子

群馬県あたりの駅を思いました。山の向こうは雪国、よく風花が山を越えてやってきます。昼間の電車は一時一本、駅員さん数名。そんな駅に置かれた小さな投書箱、いつからそこにあるのか、すっかり色あせて。投書が入っていたのはいつのことやら……とめどなく想像が広がっていきます。(なほ子)

ガラガラと建築資材十二月

石森 理和

どんな資材か、近所の建築現場に大きな音を立てて下ろされている。その無機質な音に作者は寒々とした暮れの気分を感じています。(なほ子)

寒の水飲むにふさはし江戸切子

大日向幸江

寒の水は氷る寸前のような鮮烈な冷たさのイメージがあります。身体によいともいわれます。それを飲むのにふさわしい器、といえば江戸切子で決まりますね。(なほ子)

平成も残す二年の去年今年

七郎衛門吉保

天皇の退位がいよいよ二〇一九年四月三十日と決まった。「平成」の世は大きな天災が多くありました。残りの「平成」時代はどうか平安のうちに終わりますようにと祈らずにはいられません。(泉)

クリスマスの合コン行かうよ女子寮へ

篠田 純子

七（なな）

南無阿弥陀七度び唱えてお茶の花
ふらここや七十年代のフォークソング
初生りの獅子唐七つ炒め飯
愛子さまは七歳歳と冬の朝
一の坂二の坂七坂金木犀
初めてのがッホひまはり七才の秋
七鉢の蘭蕾ある除夜の鐘
蜘蛛の巣の七色八いろ雨の露
晩春の火の国異変震度七
紫陽花の七色の夢咲かせけり
峠七つ越えて埼玉花嵐
茗荷の子三日月つづきの七つ八つ
色薄き初コスモスの七曲り

何

寒き日や財布つかみて何買はむ
山鳩の何をつぶやくしぐれ来て
何もかも押しのけてゐる孔雀草
秋めきて何か急かるる思ひせり
初雪や何する人か夜明け前
何か知ら春曙をへり響く
春寒き古物屋に何さがすもなく
母いつも何か煮てゐる梅雨ごもり

堀内 一郎
赤座 典子
齊藤 裕子
堀内 一郎
佐藤 喜孝
須賀 敏子
田中 藤穂
佐藤 恭子
秋川 泉
大日向幸江
大日向幸江
七郎衛門吉保
秋川 泉
後藤 志づ
渡辺 友七
赤座 典子
山莊 慶子
江倉 京子
石森 理和
竹内 弘子
鈴木多枝子

朝寒や何か急かる何ならむ
稔る野と駅とをへだつ何もなし
冬ざれの河に何かを投げる真似
ちやんちゃんこひねもす何も考へず
柚子湯して何いそぐことなきひとり
春一番何やらゆかし蒙古斑
ものうちて何の虚しさ羽根ぶとん
何色が御好みですか櫻草
何もかも話せた頃のさくら草
何やかと皆顔を出す掘炬燵
臘月猫すり寄りて何か乞ふ
秋の声足とどむれば何か落つ
挨拶に何かとげある秋思かな
葱むいて何決するといふでなし
秋夜妻の包む香奠何がしか
何がなし身に入む夜や門を閉づ
秋の蝶何か探しにきたやうな
一羽来て何を啄む寒雀
何もかも始めと終り冬三日月
何は扱皆の箸出す五万米炒る
寒い港クレーンの吊る箱は何
何や彼やふたりになりし雑煮かな
地虫鳴く背曲げ何に怯ゆるや

関口 ゆき
高橋 信佑
篠田 純子
芝 尚子
鎌倉喜久恵
佐藤 恭子
田中 藤穂
長崎 桂子
須賀 敏子
森山のりこ
早崎 泰江
定梶 じょう
長崎 桂子
竹内 弘子
定梶 じょう
鎌倉喜久恵
田中 藤穂
早崎 泰江
篠田 純子
石森 理和
田中 藤穂
堀内 一郎
渡邊 友七

きざらぎや何時もいつとて富士は富士
立春の何笑ひゐるナース室
昼寝覚とこであんた何方です
秋雨や頬杖つきて何もせず
新米や何はともあれにぎり飯
何色か決めかねてゐる冬菫
来年は何ある年か日記買ふ
花の下何はともあれゆるると
神は何かと問はれて黙す土用丑
雪女過ぎれり守衛誰何せり
何もかもパック詰なる節料理
何もかも常の如きよ初日記
出納簿何度も遣り直す溽暑
何事もなき一と日過ぐ秋の暮
何もかも吸ひ込んでゐる秋の空
晦日蕎麦なでしこ何度も見てしまふ
冬の暮何故か鴉の声間のび
何時もより濃すぎたしまふ新茶かな
この怒り何かは知らね田水沸く
こんな目に何んでと呟いてゐる暑さ
明易のけふは何の日何曜日
何指せる踊のゆびか風の盆
たうなすよ後期高齢とは何ぞ

須賀 敏子
田中 藤穂
定梶 じょう
早崎 泰江
長崎 桂子
長崎 桂子
田中 藤穂
森山のりこ
堀内 一郎
定梶 じょう
森山のりこ
森山のりこ
長崎 桂子
早崎 泰江
山莊 慶子
赤座 典子
早崎 泰江
須賀 敏子
定梶 じょう
篠田 純子
田中 藤穂
定梶 じょう

何時となく冬空に浮く飛行船
咳込んで何か言はんとせし母よ
何事もなきこと祈る去年今年
裸木に何か下がってゐる静寂
何買はう立春大吉花屋混み
何もかもが当たり前となる石牡丹
家の釘何本も抜き春をはる
何語るさくらんぼうの木の下で
何もかも竿のものをさへ枯れつくし
五月晴何に出会ふか靴磨く
何よりも葡萄が好きと夫のいふ
阿久悠は何と詩ふか秋大雨
石に坐し何に思案の雪女
春の風邪夕べは何を食べたつけ
盆提灯うごきて何かものの影
何もせぬ男もをりてお井戸替へ
蒲の絮飛んで何にもない処
何の日の国旗立ちけり種物屋

名にし負ふ

名にし負ふ上海蟹の卵かな
名にし負はば桜山とて登りゆく

佐藤 恭子
竹内 弘子
早崎 泰江
篠田 純子
定梶 じょう
赤座 典子
佐藤 喜孝
井上 石動
定梶 じょう
長崎 桂子
須賀 敏子
七郎衛門吉保
竹内 弘子
秋川 泉
田中 藤穂
中川句寿夫
中川句寿夫
定梶 じょう
赤座 典子
鎌倉喜久恵



佐藤 喜孝

篠田 純子

あえかなる光のちから梅の花

光の粒子を帆に当てた力で舟が宇宙を旅することができると聞いた気がするが。掲句の光の力は春まだ浅いころの太陽光。その光の力がつもり積もって梅の花を咲かせたと云ふ。早春のまだ寒々とした日の光も積もり積もればびつくりする働きをする。

年立や雨おちの石凹む迄 小林 一茶

手のひらの赤しスケート靴白し
淑やかな手話の一団梅ふふむ

大いなるマラソン日和牙返る

大いなるマラソンはおもしろい捉え方。一読道路を埋め尽くす東京マラソンをおもった。日和に付ける季語は「時候」からはではなく、他の項目から探してみたい。

鳥の名を覚えきれずに二月尽く

鳥の名前は覚えにくい。わたしも昔日野鳥の声を録音したLPを何回も聴き山に出かけたが、覚えが悪く用をなさなかった。「二月尽」は、いよいよ鳥の種類が増えてくる春への期待であらう。

田中 藤穂

春光や鳥影しげき庭の木々

当たり前でないことより当たり前のことを句にするのは難しい。この句も毎日眺めて暮らす庭から俳句を作らうといふ刺激を受けるのは作者の心構へ一つ、といったも難しい。「春光や」と確り据ゑたことにより見慣れた庭が輝きだした。光の中で、時に光を遮り枝移りする小鳥の様が伺へる。「庭」は詩語になりにくいことばの一つ。

その場の雰囲気は伝はってきた。上五に作者の温かさがみえた。

先月藤穂さんの句の「後ろ手」を単純に後ろに組んだ手と読んだ。お会ひしたとき「後ろ姿」といふ意味もありますよ」と教へられた。辞書にはたしかに「後ろ姿」の意もあつた。掲句の「ふふむ」も不安になった。

漢字では「含む」。ところが読みは幾通りかある。ふくむ・くくむ・ふふむ・ほほむと。「ふふむ」と「ほほむ」は同じ意味でまだ苔のままだといふ。日本語の繊細さにあらためて畏敬の念を抱いた。

須賀 敏子

春の雪溶けて熊笹立ちあがり

この句の「春の雪」は冬に積もった雪が春になったと読んだ。で、春の雪といへば春になって降る雪のことである。で意味としては「春に雪」「雪溶けて」とするのも一法。残雪・雪間・雪解けなどもある。

水仙の香の満ちておし畳かな

一読、物の余り置かれてゐない部屋を想った。畳もまだ青いと尚更良い。水仙と畳の香のハーモニーを愉しませていただいた。無駄の無い表現がもたらした佳句。

「畳」といへば堀内一郎さんの『あを』十周年記念の句集名。あのシリーズは全てわたしが勝手に名付けた。

天井の分だけ畳明易し 堀内 一郎

戦争と畳の上の団扇かな 三橋 敏雄

ひろびろと母坐す盆の青畳 伊藤 通明

春雲俳人の計の相継げり

殊更何も云はぬが胸の内で合掌されてゐることだらう。春みぞれは雲と違ひどこか華やきがあるが、やはり雲に変はりはない。

石森 理和

アネモネの日増しに開き大輪に
アネモネの花弁数へ百枚に

アネモネの花、見てゐるのだらうが知らない。調べたら花片の数も色もさまざま、花音痴にはお手上げ。しかしことばの響きは優しく魅力的。一句目、無技巧といつてよいほど淡淡と成長の様を述べてゐる。アネモネに関心を持ち、毎日観察してゐる優しい作者がある。そのお陰で見事な花が咲いたやうだ。花と対話し、それを纏める。俳句作りの一つの楽しみだ。

山合ひの農家二軒の日向ぼこ

日向ぼこをするのは人間、いや犬、猫、天道虫など生き物がすること。掲句は肩寄せ合ふやうに在る二軒の農家が日向ぼこをしてゐるやうだといふ。理和さんの心を惹きつけるものがあつた。そしてわたしも惹きつけられた。佳句。

七郎衛門吉保

遠慮なく大声出せる鬼遺らひ

神木の二の腕あらは鬼やらひ 鷹羽 狩行

胸中の荒れ鬼やらふ声に出づ 中原 道夫

季語の「鬼やらひ」を動詞に変化して使ふ句もある。

秋川 泉

春の闇何かが通りゆくけはひ

他の季節と春とでは「闇」の雰囲気が違う。泉さんは生き物、物の怪のやうなけはひを感じた。けはひとはなと書き出すのは辞書の引用だと先刻バレーバレ。「けはひ」は「けわい」の旧かな表記。で口語では「けわい」になる、といふことなのか。ちよつとシヨック。「気配」は当て字。よつて辞書では「けわい」に紙面を割くことになる。掲句、思はせぶりで何か物足りなかつた。

手の甲で淡雪よけて廻ゆく

春の風枝に結んだ落し物

路上の落し物。ハンカチだったり子ども靴の片方だったり、手袋などは見向きもされない。中には親切な方がをられ腰を屈めて拾ひ踏まれないやう、目に付くやうに置いてゆく。掲句は落し物と分かる物が枝に結ばれてゐる。ここなら風に飛ばされないし目に付く。この落し物を見た作者は心がほつかと温もつたのだらう。時は春、風がそよそよと気持ちがいい。

日常生活ではわが近辺では大声が聞かなくなった。酔つ私の喧嘩を覚えてゐる位。昔はこの家でも子どもが大声を出して豆を打った。わたしもやらされたが嫌々済ませた。そこへいくと吉保さんは大張り切りのやうである。が「出せる」と可能であると言つたので出したか出さなかつたかはその後の話。さあどちらだったのでせう。

節分を過ぎ半歩ほど温くなり

節分は文字通り季節を分けると。一年に四度あるが、特に立春の前日を云ふ習はしに江戸時代からなつたとある。掲句はこの節分の季語の意味に添ひて発想された。「半歩ほど」に作者の工夫がある。

兜太逝く反戦の牙寒天に

ありふれたフレーズでマスコミも使はぬが正に「巨星落つ」と云ふ思ひである。現代俳句を牽引し俳人に多大な影響を与へるづけた。これからさまざまなところでさまざま人の悼句が目になることであらう。掲句はその先駆けである。

敗戦日非業の死者と風の島に 金子 兜太

原爆許すまじ蟹かつかつと瓦礫あゆむ

長崎 桂子

せせらぎの走る庭園芽吹かな

冬枯の庭園がいのちを得たやうに動き出した。水はせせらぎ、声をあげて流れる。草木の芽も動き出した。春の兆しを桂子さんはいち早く感じ喜びを句にした。

水彩画の如うるはし名の木の芽

水彩画は油絵と違い透明度のある色彩。名の木の芽が淡い色を帯びて膨らんできた。作者は最上級のことばを選び誉めたたえる。「うるはし」、久しぶりに聞く忘れてゐたことばである。

やはらかく芳しき宙木の芽風

木の芽の吹くころの宙をやはらかき、芳しきと畳みかけていふ。宙をこのやうな若々しい感性で捉へる。羨望を覚えた。

春浅し脱いだ形に色足袋の

色足袋のまだ体温があるかのやうな脱がれたままにある。下五「の」と確り終らせず、浅春の情緒を醸してゐる。ほかに幸江さんはよく句尾を「の」で終はらせる。季を待つ伸び伸びと裸木の光り浴びくるくる回る矢車の巖から岩ひたひたひたとはんざきの裾たくし上げ浪と戯れ夏服の等である。幸江さんは考へがあつてのことだらうが、わたしには据りが悪く落ち着かないのだが。

色を見てふんざり付けて鱧を買ふ
眼見て玉子くぐらせ鱧天に

鱧とか鰻は上品すぎてわたしには旨さのよく分からぬ魚であるが、好きな人は別格な魚であるらしい。幸江さんもそのお一人のやうである。店頭で鮮度を見極め財布と相談したが誘惑に勝てず買ひ求めた。句にする位なので大満足の鱧天であつたであらう。

定梶じょう

石投げてしたたか撥ねて寒の沼

川原へ出ると石を投げたくなる。平らな石を探して水面を何回か撥ねるかを競ひあつた。こんな単純なあそびにも確りと「水切り」といふ名前があつた。ギネスブックにも記録があり、80回、90回と驚きの回数である。掲句は回数のこととはともかく、予想外に撥ねたことにびつくりした。間接的に厳しい寒を、寒中の沼を詠まれてゐる。

春隣腹の立つこと多々あれど

嫌なこと、腹の立つことが多々あれどもうすぐ春だと思へば……と呟いてゐるかのやうな句。訥々とひとり思ひ独り言のやうな句を作られる。なかなか真似が出来ない。

宝くじ麦を踏みつつ買はむなど

麦踏は映像で見るだけで、経験も実際に見たこともない。想像するに、ただただ麦を踏み畑の端まで行ったら畝を替へまた踏み出す。単純で頭の中では他のことを考

金子兜太さん

反戦の人見届けし節分草

那須温泉

客寄せのアルパカ二頭春の雲

春泥に塗れ乳牛 佇めり

一句目動物の性格は姿形ほど違ひは無いとおもふ。が、コアラ、パンダ、うさぎなどは人に好かれる姿をしてゐる。アルパカもそれらに負けぬ人気者である。「客寄せ」とはまたシニカルなひ方であるが、現実だから仕方がない。典子さんもわかつてゐてお孫さんの後ろをついて行きながら作戦に乗つかつてあげたひとり。

春の雲がアルパカのやうにのほほんと浮いてゐる行楽日和であつた。

二句目、この乳牛、牛舎ではなく放牧されてゐるやうだ。春泥にまみれた乳牛の牛乳は濃厚で美味しさうだ。「佇めり」は春泥に困惑してゐるやうですこし違和感があつた。

へられるかも知れぬ。時には宝くじを買つて見やうかなど。もし当たつたらあれとこれなどと想像が膨らんでゐるかも知れない。



佐藤喜孝 著

青宮武貞

を読む

佐藤 恭子



手を抜くと夏草たちまち真珠湾

屋上に鉢物を置いて楽しんでゐる。またプランターに
苺・アスパラガスなど素人の私でも作る事が出来るもの
を少しそだてて愉しんでいる。少しの収穫でも嬉しいも
のである。ところがひと雨きた翌日屋上に行くと、びっ
しり雑草がプランターを埋め尽くしている。こんな短時間
のうちにと最初はびっくりしてしまった。それからは何
と生命力があるものだと感心している。

真珠湾とは、アメリカハワイ州オアフ島南岸の天然の

良港である。二つの火山の裾野に刻まれた谿が沈水して
生じた溺れ谷との事。日本では愛媛県南部・若狭湾・三
浦半島南部・三陸海岸などに今でも残っているようだ。
手抜きをすると夏草はにわかに真珠湾だよと。
一九四一年十二月八日午前三時アメリカの太平洋艦隊
に日本軍がおこなった真珠湾の奇襲攻撃である。
この句は、真珠湾とだけ言つてとまっている。しかし
「たちまち」という言葉がついているだけでただ真珠湾
を言っているだけではない事が分る。人間のこころも、
あるであろう草の心も詠込んでゐる。戒めととるか肯定
しているのか読者に……。

男の子生る軍はなめて日の本ゆ

一九四一年生れの私にとって、男の子が生れるのがと
ても怖かった。生れた途端、病院の先生が大きな声で「男
の子ですよ」叫んだように聞えた。「先生、女の子じゃ
ないのですか」と「御長男ですよ、おめでとうございま
す」と……。

ここから心の隅にいつも平和な国でいつまでもいて欲
しいと片時もねがわなかった刻はない。

この句は、日本国のために軍はおしなべてあるものだ
と言っている。男の子が生れて嬉しいという気持が表面
には出ていない句である。男親にとって、自分の分身
が出来たときは本当に嬉しかったと、父が言っていた事
があった。

上五に「男の子生る」をもってきたところにこの句に
男親の嬉しいという感情が隠されているように思う。

お国の為にという言葉で、故国をあとにした若者のこ
とが脳裏を掠めこの句が出来たのではないだろうか。

二十数年前危惧していた事が最近徐々に現実味を帯び
てきた。

世界に誇る非戦の憲法、地球上に非戦の憲法を持つて
いるのは、二国しか表明していないが、是非永遠に遵守
して欲しい。

颱風來街に山川近づけり

今年の東京はいまだに暑い。自分がこんなに暑さに弱
かったのかと驚きもしている。

さすが空の上は秋の気配を感じさせるように雲の形が
違ってきている。気温も異常に高かったが、例年になく
本土に颱風の上陸が多かった。何といつても恐いのが風
であるが、それに大雨が加わるとドキドキしてしまう。
私の住んでいる所は隣との境がないくらい接近してい
るので風はそれほど恐くない。

颱風が来ると雨風によつてもたらせられる被害は、川
の氾濫また山が崩れて道路や線路もなくなってしまう。
隣の町まで土砂が押寄せてくる。

颱風によつてもたらされた被害の状態を「山川近づけ
り」とやさしい言葉で言表わしている。颱風の恐ろしさ
もこのような表現でいわれてしまうと何だか妙である。

あとがき

日本人として初めて覚える俳句、俳諧はなんだらう。「古池や……」はまづ十本の指に入るとおもふ。この句を思ひ出す度に冷や汗が出てくる。目では「ふるいけや」と読んでゐながらイメージは古井戸に後年までなつてゐた。井戸でなく池だと分かつたときの驚きは今も忘れない。

加藤郁平著『俳諧志』の几董の『新雑談集』

武の竹護、原の白陰和尚に相見の時、閑談時うつりて後俳諧のさたにも及び侍りて、先芭蕉の名句いづれにやと尋ねられしに、古池の蛙をかたり出で、画賛染筆の事を望まれしに和尚やがてしたゝめ贈られしが、上五文字を古井戸と書あやまち有りけるぞとかくおもひながら、しかじかのよしを申付けければ暫く沈吟して、此句は古といふ字眼目成るべし、さは池井戸違へるともくるしかるまじやなどと即答ありしとぞ。

この文を読み嬉しくなった。同著は続けて、「古」といふ一字の重さ「大眼目」の働き、と書かれてある。そして仙崖和尚の三句を紹介してある。

古池や芭蕉飛びこむ水の音

池あらは飛て芭蕉に聞かせたい

古池や何やらぼんと飛びこんだ

二〇一八年四月号

発行日 四月二十四日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円（送料共）／一年

ゆうちょ銀行（普）（店番018）4586402

佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）